

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720027

研究課題名(和文)古写経を用いた『三法度論』の基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental Research in the San fa du lun on the Basis of Old Japanese Manuscripts

研究代表者

林寺 正俊 (HAYASHIDERA, SHOSHUN)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：60449361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：近年、日本の寺院が蔵する古写一切経の調査により、わが国に残されている古写経の中に、版本(版木による印刷版)と全く同一の経題を冠しているながらも、その内容が版本と大きく異なるものも含まれていることが判明してきた。本研究ではそうした仏典の一つである『三法度論』の古写経本を取り上げて検討し、版本に基づく従来の漢訳仏典研究だけでは知ることのできない仏典伝承の多様な様相を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The recent first-hand investigation of Buddhist manuscripts preserved in Japanese monasteries has made it clear that some manuscript versions of Chinese translation of Buddhist scriptures are largely different from their woodblock printed versions in terms of contents, even though they all bear exactly the same title. Taking up one of those texts of the above-mentioned kind, that is, the text of the San fa du lun found in old manuscript collections, I clarified different aspects of the transmission of Buddhist texts, aspects that we would not have learned from the study based on the woodblock printed versions alone.

研究分野：人文学

キーワード：仏教学 古写経 『三法度論』 「三法度経本」 『四阿含暮抄解』 ヴァスバドラ

1. 研究開始当初の背景

(1) 『三法度論』の新出テキストの発見

近年、日本の寺院が蔵する古写一切経の調査により、版本一切経に収められている仏典と同じ題名を冠しながらも、内容の異なる仏典がしばしばその中に発見され、そのような仏典の発見によって、従来の諸版本だけでは知られてこない仏典伝承の多様な様相が明らかになりつつある。当科研費で研究対象とした『三法度論』も、まさにそうした仏典の一つであり、その日本古写経本はこれまで知られてきた諸版本と異なる新出テキストであることが判明した。そこで、『三法度論』の文献研究に古写経を活用することの重要性が認識された。

(2) 『三法度論』の先行研究の少なさ

『三法度論』はインド仏教の有力な一部派であった犢子部が伝えたと推定される論書である。犢子部は、原始仏教以来の無我説を大枠では維持しながらも、実質的にはインド哲学一般でいう「我」(アートマン)に近いような、人格主体としてのブドガラ(ブドガ)の存在を主張したと伝えられる部派であり、特にこのブドガラ説については、犢子部を厳しく批判した説一切有部の文献を通して夙に知られてきた。ただし、犢子部自身の伝えた文献に基づいて犢子部説を検討した先行研究は極めて少ない。さらに、本邦においては『三法度論』を取り上げた研究は皆無と言ってよく、本書の教理研究は言うに及ばず、そもそも訓読や訳注などの基礎研究さえも存在しない。インド語原典やチベット訳が存在せず、漢訳だけで伝えられているせいか、重要な文献であるにもかかわらず、その研究は今日まで充分に為されているとは言い難い。

2. 研究の目的

当研究は、従来の諸版本と異なることが判明した古写経を新たな文献資料として用いることによって『三法度論』を総合的に解明するための基礎的な土台を作ることを目的としている。具体的には、以下の4点を目指すものである。

(1) 古写経系テキストの特色の分析

『三法度論』本文はヴァスバドラという人物の作った簡潔な「経」(スートラと呼ばれる短文)とその「経」に対してサンガセーナという人物が付した注釈文とから成るが、従来の版本系テキストでは、両者が区別されない体裁で記載されており、どれが「経」で、どれが注釈文なのかが判然としない。しかしながら、古写経系テキストの冒頭には、ヴァスバドラの「経」だけの集成と見られる「三法度経本」と名付けられた独自のテキストがあり、まさにこのテキストによって「経」と注釈文との区別できるようになっているのである。まずは、この「三法度経本」の特色を分析する。

(2) 「経」の峻別、及び本文テキストの確定
上述したように、版本系テキストでは「経」とそれに対する注釈文の区別が困難であるが、古写経冒頭の「三法度経本」によって「経」とそれ以外を判別することが可能となる。また、『三法度論』には『四阿含暮抄解』という先行する異訳もあるが、この『四阿含暮抄解』には「修妬路」(スートラという語の音写)という割注が「経」の文章の末尾に必ず挿入されており、「経」と注釈文が明確に区別されている。

そこで、古写経冒頭の「三法度経本」、『三法度論』の本文、割注を有する『四阿含暮抄解』という三種のテキストを比較・対照しながら、まずは「経」と注釈文を峻別する。そして、諸本間の校異を取って『三法度論』の本文テキストを確定する。

(3) 『三法度論』の内容読解

前項の(2)に述べた「経」と注釈文の峻別作業、および本文テキストの確定作業と並行しながら、『三法度論』の内容を読解する。その際には、異訳の『四阿含暮抄解』と対照しながら検討することで、本書の内容をより正確に理解する。

なお、本書にインド語原典は存在しないが、読解に際しては、可能な限り、登場する仏教術語のサンスクリット語を推定することも必要な作業となる。

(4) 『三法度論』の教理とその特色の分析

以上の基礎的作業を踏まえた上で、『三法度論』に説かれる教理・思想を検討し、その特色や独自性を解明する。

3. 研究の方法

『三法度論』の日本古写経3本(金剛寺本・七寺本・興聖寺本。いずれも同系統)高麗再雕本をはじめとする『三法度論』の諸版本、および異訳の『四阿含暮抄解』(必要に応じてその古写経も参照)を一字一句丁寧に比較・対照する作業が、以上の研究目的を達成するための最も基本的な方法である。

古写経3本のデジタル画像(写真)については、それらの実地調査が当研究課題の申請前にすでに完了していたため、研究開始当初より利用することが可能であった。

なお、『三法度論』は漢訳でのみ伝えられており、内容的にも難解な教義学的議論を多く含んでいて容易に読み解けるものではない。かかる性質に鑑みて、全3章から成る『三法度論』を章ごとに分割し、1年につき各1章の研究を行なうようにした。

4. 研究成果

当研究期間に以下の成果が得られた。

(1) 古写経系テキストの特色の解明

古写経冒頭の「三法度経本」には重要な資料的意義がある一方で、問題点も存すること

が明らかとなった。それぞれ次の3点が挙げられる。

資料的意義としては、「経」がどの文であるかが区別化・明確化されていること、「経」の作者が「婆藪跋陀」(Vasubhadraの音写)と明示されていること、諸版本では一連のものとして挙げられている帰敬偈にもヴァスバドラと注釈者との区別があると示されていること、である。

他方、問題点としては、誤伝に基づいた訳者名が記載されていること、8字分の錯簡があること、「三法度経本」に掲載される「経」の中に本文中の訳文と異なるものが若干含まれていること、である。

(2)「経」の峻別に基づく知見

古写経冒頭の「三法度経本」、『三法度論』の本文、「修妬路」という割注を有する『四阿含暮抄解』という三種のテキストを比較・対照して、「経」と注釈文を峻別した。その結果、ヴァスバドラの作った「経」は全部で約180と判明した(数え方によって2、3は前後する)。この作業とあわせて、諸本の校異を取って本文テキストを確定した。

(3)古写経系テキストの成立過程の解明

研究を始めた当初は、「経」の判別が可能となっている古写経系テキストの方がより本来的な形で、版本系テキストの方が後に編集された形であると推定していた。しかしながら、古写経冒頭の「三法度経本」中に含まれる、本文中の訳文と異なる「経」の諸事例(上に言及した研究成果(1)の問題点)を委細に検討した結果、当初とは逆の推定、すなわち、版本系テキストが本来的な形で、古写経系テキストが後に編集された形である可能性が高いことが明らかとなった。また、そうした編集の主要な動機は「経」の訳文を明確化することにあつたことも確認された。

(4)『三法度論』の教理展開の特色の解明

確定した本文テキストをもとに内容を検討したところ、本書は、本来の法数が「三」ではない教理(たとえば、五蘊や四念処など)を含む、ほぼすべての教理について「三」という数字を基準に分岐的・階層的に解釈していること、そのため教理本来の法数が「経」には決して現れないこと、さらにこうした解釈自体が「仮のもの」と位置付けられていることなどが明らかになった。「三」を基準とした教理解釈で一貫する理由は充分に明らかにならなかったが、少なくとも「経」の作者ヴァスバドラの強い意向に基づいていることが確認された。

(5)その他

当研究の直接的な成果ではないが、付随的な成果としては、『三法度論』などの新出資料を含む日本古写経のデータベースが構築・拡充されることの意義についても明らか

にして、研究発表を行なった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

林寺 正俊「日本古写経本『三法度論』の成立 - 「三法度経本」の編集とその動機 - 」『東アジア仏教研究』第13号、平成27(2015)年、査読有、全15頁(印刷中)。

林寺 正俊「日本古写経本『三法度論』の資料的意義と問題点」『東アジア仏教写本研究』(国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・文部科学省戦略プロジェクト「東アジア仏教写本研究拠点の形成」実行委員会編)、平成27(2015)年、査読無、173-183頁。

Shoshun HAYASHIDERA “A Hitherto Unknown Version of the *San fa du lun* 三法度論 in Old Japanese Manuscript Collection: Potencial and Problems”, *Journal of Graduate School of Letters* (Hokkaido University) Vol. 10, 2015, 査読有, pp. 1-11. DOI: 10.14943/jgsl.10.1

林寺 正俊「『三法度論』における教理の展開」『日本佛教学会年報』第79号、平成26(2014)年、査読有、49-66頁。

林寺 正俊「日本古写経データベースの構築とその意義」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集2012』(情報処理学会シンポジウムシリーズ)、平成24(2012)年、査読有、11-16頁。

[学会発表](計5件)

林寺 正俊「日本古写経本『三法度論』の成立について」東アジア仏教研究会2014年度年次大会、平成26(2014)年12月6日、駒沢大学(東京都世田谷区)。

林寺 正俊「日本古写経本『三法度論』の資料的意義と問題点」国際シンポジウム「東アジア仏教写本研究」、平成26(2014)年7月27日、国際仏教学大学院大学(東京都文京区)。

林寺 正俊「『三法度論』における教理の展開」日本佛教学会2013年度学術大会、平成25(2013)年9月12日、早稲田大学(東京都新宿区)。

林寺 正俊「日本古写経データベース - その利用と将来の展望 - 」日本印度学仏教学会64回学術大会、平成25(2013)年9月1日、島根県民会館(島根県松江市)。

林寺 正俊「日本古写経データベースの構築とその意義」人文科学とコンピュータ

シンポジウム、平成 24(2012)年 11 月 17 日、
北海道大学（北海道札幌市）

〔その他〕 なし

6．研究組織

(1)研究代表者

林寺 正俊（HAYASHIDERA Shoshun）
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60449361

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし